



「ふたたび月へ」

野本陽代 著

丸善ライブラリー

216 ページ, 740 円

読み物

お薦め度

☆☆☆★★

サイエンスライターの著者が、「第2回月・惑星探査シンポジウムふたたび月へ」に参加したことから、日本による自力の宇宙開発は、現在進行形の現実であると実感した。この感動を発端に、進行中の日本の月探査の意味と現状、そして未来を、軽い興奮をもって自分なりにまとめた、という本だ。

9章だてになっており、本を書く発端となった動機から考えて、7章 日本の宇宙開発、8章 有人宇宙開発、9章 ふたたび月へ が主眼であると思われる。しかし、これらについて語るためには、これまでの宇宙開発がどのようなものであったか説明しなくてはならない。これを、1, 3, 4章で、19世紀後半に明確に形をとり始めたロケットへの夢からアポロ計画終了に至るまで概観した。さらに「宇宙開発で得られた技術などが私たちの毎日の生活にどう生かされているのかについて」ふれたいという著者の要望から、5章 スピンオフと人工衛星が、「月を研究することが私たち地球人にどういう意味をもっているのか」示すために、2章 日本人とお月様、6章 月の科学 が書かれた。

言いたいことを語るにはこれだけ必要だという情熱のもとに、この章だてが考えられたのだと思う。しかし、明らかに欲張った内容なので、手際よく人に伝えようとすると、これまでに書かれた関連本の骨組みをうまく抜き出した教科書的な印象を与えるものになってしまうのは仕方ない。これまでの宇宙開発について説明した部分でその感を持った。私は理学系の学生であり、これまで深く関わってこなかった、5章や

工学系の開発、エンジンの説明については非常に面白く読めた。だから、なじみのなかったことへのとりかかりとしては、よくまとまっていてよいと思う。この本は、読み終わってさらに詳しいことを知りたいと思ったときにもう少し深く踏み出す糸口になるだろう。月の科学の章については、問題提起のポスターとして読むべきもののように感じた。月で何がわかっているのか、何が問題なのか、この問題に初めて接する人と非常によくわかっている人とは、いちいち理解しながら読んでいけると思う。そのどちらにも属しないと自負する人は、雨降りの日曜の午後に腕だめしに読むと楽しいと思う。全部の章を欲張らずに、7章以降に、または月の科学にもっと重心を置いてもよかったのではないかというのが私見だ。7章以降には、平和にねぎらった、日本の自主技術による宇宙開発、というメッセージが色濃く現れている。政治の中核にある人がこのような本を熱心に読み漁るように、早くなってくれるといいだろう。昨年7月出版の比較的新しい本であり、まさに宇宙開発の最先端にアンテナを向けているという態度がいい。先日MVロケットで打ち上げられた電波天文観測衛星MUSES-Bこそ、まだ近々の打ち上げ予定となっているが、スペースシャトル回収後の宇宙実験・観測フリーフライヤSFUについてもふれている。著者の狙いどおり、日本の宇宙開発をざっと見渡す読み物として、うまくまとまっていると思う。

齊藤智子 (宇宙科学研究所)